

第21回 2014年1月22日(水)

ゲスト 高岸敏雄(朝日放送元編成局長、常務取締役)

テーマ 放送史に残る名物番組の軌跡を追う

「OTV時代からTBS-NET(のちにテレビ朝日)へのネットチェンジまで  
～テレビ草創期の秘話を語る～」

主な内容

- ◎世界の初日の出～朝日放送単独で19か国から生中継～
  
- ◎TBSからNET(テレビ朝日)へネットチェンジ～大型番組開発でイメージアップ～
  
- ◎鑑真和上像里帰り特番から、宇宙をテーマに「コスモス」衛星生中継まで
  
- ◎超大型ドキュメンタリー「コスモス」 朝日新聞ほかとのメディアミックスが成功
  
- ◎テレビ朝日編成責任者 小田久栄門との協力関係強める
  
- ◎OTV時代の上司は・大プロデューサーの小谷正一
  
- ◎関西初の民間放送テレビ OTVと開局秘話“堂島川にクジラ”
  
- ◎ネットの弱体化にどう立ち向かうか “選挙運動”スタイルで番組PR
  
- ◎「おはよう朝日です」 京都(KBS)、神戸(サンテレビ)に“お天気カメラ”
  
- ◎パ・リーグ優勝かかる「ロッテ・近鉄」戦 異例の長時間放送
  
- ◎夏の高校野球中継 “おしゃれなコマーシャル”の発想は
  
- ◎退職後も“宇宙”にこだわる 小惑星探査機「はやぶさ」のPRなど
  
- ◎民放は5局から3局に減らすべき～10年後のテレビ～

司会 高岸さんのご紹介から始めさせていただきます。今日は、高岸さんは「編成マン」でいらっしゃいましたので、大阪テレビ・朝日放送テレビ時代の「大編成的な考え方」について伺いしていこうと思っております。

1955年、昭和30年に大阪外国語大学英語学科をご卒業。学生時代は演劇に明け暮れていらっしゃったそうです。それから、ご実家の関連の業界に就職後、病気をされまして方針転換。折から大阪テレビができるということで、受験をされ見事に合格。ご本人曰く、入社作文をドラマ仕立てでお書きになったようです。それが選考する人の目に留まって合格というので、今後の受験生が入社試験のときにそういったアイデアの一つができるかもしれないというヒントをもらったような気が致します。1956（昭和31）年入社後は、小谷正一さんの総合企画室に所属。編成・番宣の仕事に就かれ、その後会社に労働組合が出来るとともに、テレビ部門の事情を知るものとして労政部へ移籍、ほぼ10年間務められ、テレビ編成部へ。1973年にテレビ編成部長、1975年4月からネット変更時の現場責任者へと進まれたようです。OTVに入社されどんな仕事からお始めになったんですか。

<世界の初日の出～朝日放送単独で19か国から生中継～>

高岸氏 まず、僕の英語力ですが、確かに大学は英語学科でしたが、この大学は一般と違って固定単位の取得が少なくてすむということで受験したことからも、ほとんど芝居に入れ込んでいました。

入社直後に開局記念パーティーで、出席者のアメリカ中心の放送関係者のお相手をまかされた際、同じ総合企画室から一緒に出席した4年先輩の秋田次平という人の英語力に圧倒され、今後はこの人を通訳として活用しようと、僕のこれから行く道を決められた思いがしたものでした。秋田氏は京大卒、第一回ガリオア留学生として3年間アメリカ留学のベテランで、その後ホテルプラザへ出向され、その後の「コスモス」やカラヤンやバレンタインなど番組収録の上での交流など、ともにパートナーとして活躍願った方でした。

そこで今日のお話は、最初に出野さんからご連絡いただいたときに、ABCの「世界の初日の出」という番組をどんな風に放送したかを聞きたいということからスタートしたのですが、確かに正月の午前1時から翌日の1時半まで地球一周して、世界の初日の出を追っかけようという企画は当時としてはユニークな企画でした。

50周年記念の社史「朝日放送の50年」にその記録が載っています。「一局単独で、しかもローカル局が世界19か国からの生中継をやりとげたのは、後にも先にもABCだけであろう。教養色の強い『コスモス』とは違って中身はシンプルだが、仕掛け

はでっかい」とあります。

ニュージーランドのクライストチャーチから始まりましてね、そこから、グアム、富士山、二見が浦、上海、バンコク、それからスリランカ、ヒマラヤ、ナイロビ、カイロ、アテネ、パリ、スイス、ロンドン、リオデジャネイロ、広島、ケベック、メキシコ、グランドキャニオン、ハワイという風にね、ずっと世界の日の出を追いかけるわけです。当時やっとな整備された太平洋・インド洋・大西洋、三つの衛星を結んでの作業ですから技術の力もさることながら、正月番組といえば大体が東京の局が制作するわけですから、その中へ初日の出を挿入、編成する協力をどうして実現できたか、さらにブラジルと広島で西川きよし親子を配置して対面させたり、日本で初日の出を見た視聴者をハワイへ連れて行き、翌朝の初日の出を見たあと、演奏会に出席するのを放送したりとか、そしてさらに、次の年にも「おめでとう！地球さん」と題して全国ネットで行っているわけですから、かなりのことだったと思います。

<TBS から NET(テレビ朝日)へネットチェンジ～大型番組開発でイメージアップ～>

—— 高岸さんはこの番組にどんな風に関わっておられたんですか。

高岸氏 1975年のネットチェンジのあと、朝日放送としては編成的にも営業的にも大苦戦でした。東京のキー局がTBSからNET、現在のテレビ朝日に入れ代わったのが1975年4月。このネットチェンジで、朝日放送はとにかく大転落でした。視聴率は大阪トップから最下位へ。それから民放101社の中で唯一秋の中間決算が赤字というのは1社だけでした。それからどんな風に回復するか、再出発のきっかけを何にするかで、「開局30周年」に目を付けたのです。ところが「開局」はラジオの開局ですから、我々はABCだけですが、MBSの場合はJNN系列としてTBS、CBC、RKB、HBCと共同で組めるわけですから、逆にみずぼらしくなってしまうことになります。ところでそのとき、朝日新聞社が100周年記念を大阪本社開設の日から、東京本社開設の日までの約1年間を100周年記念として展開されていたのにならって、数えの30周年から満の30周年へと1年間を記念期間として視聴者還元をうたえば、かなりのイベントができるのではないかと考え、役員会の了承を得たのでした。

そこへ原清社長が1980年の年始の会見でシンフォニーホールの建設を発表されるのですが、それをきっかけに、まあいろいろな話が重なってくるんです。

奈良・唐招提寺の国宝鑑真和上像が中国へ里帰りする話がもち上がり、北京の放

送局と組んで、事業とドキュメント番組作りの企画が生まれ、さらに制作からは、春のスペシャルドラマ「額田女王」（原作井上靖）前後編5時間が出てきました。

<鑑真和上像里帰り特番から、宇宙をテーマに「コスモス」衛星生中継まで>

つまり春3月にドラマ「額田女王」。それから5月に鑑真特番「1200年目の回廊 鑑真いま故郷に帰る」（3部作）が続く。それから翌年1月には、藤山寛美出演の初演作品「桂春団治」を創立30周年記念番組として放送しています。トリは寛美さんでいこうということになった、そして秋に、あのカール・セーガン博士出演の「コスモス」を放送しているのです。

（「COSMOS」1980年11月3日～11月12日、110分4回、55分5回）。

これはたまたま、当時、アメリカのタイムライフ社の日本支社長が日本人の北岡靖男氏（秋田次平氏とアメリカ時代の友人）で、この人がカール・セーガンと親しくて、仲介役となっていた。ところが「コスモス」はね、内容的にどちらかと言えば、NHKの教育テレビがやるような番組だから、またカール・セーガンも日本では知られていないし、何とか宣伝してくれる媒体と組まないことにはどうにもならないということで、集英社、講談社、小学館といった出版社と組めば、出版社自体が宣伝しますから。というので、小谷正一さんのところへ相談に行くんです。当時OTVを辞めて電通に行かれ、電通から「デスクK」を作られたときでした。私たちは何とか放送したいというので相談に行ったんですが、カール・セーガンにも凄く魅力を感じられたようで「こういうのは日本人にいないなあ」と。しかし僕らの思っている（出版社と組んで宣伝という）イメージではなくて、やっぱり朝日新聞と組め、ということなんですね。なぜかという、こういうものは、視聴者との信頼関係をどう築くかが非常に大きな要素を占めていると言うのです。ところが僕らはその頃、朝日新聞はいわゆる「眠れる獅子」というか、派手な宣伝に耐えられるようなところと全然違うと思っていましたので。誰に相談して良いかも分からないし、講談社とか、あの辺だったら攻めやすいんで、ということをおもうと思っただんですが、朝日新聞にとにかく一度行ってみる、それからその獅子を起こしたら良いんだからということになったんですね。

「宇宙という相手だけに、信頼性が大事だ。君のいう眠れる獅子でも朝日新聞の力は大きいよ。活用すべきだ。“朝日が”の展開がスケールをひろげる」と教えられ、「カール・セーガンは新しい童話作家だな。月へ人間が行ったそのときから、漫画家たちは夢を失ってしまった。科学が人間の夢の先を行くようになってしまったんだ。人間は科学の先にある夢をさがし、それをとり戻さないといけなくなっている。

文科系からは現代のロマンは出てこないだろう。サイエンスをふまえ、それをこえたところに現代の新しいロマンと夢があり、理科系から本物のロマンチストが出現するのではないだろうか。丹下健三とか、糸川英夫とか。エジソン、ディズニー、セーガンと、アメリカに夢を運んだ新しい天才かもしれない」（小谷正一氏、1992年8月8日、80歳で永眠）。

<超大型ドキュメンタリー「コスモス」 朝日新聞ほかとのメディアミックスが成功>

それで、朝日新聞の科学部へ。当時、科学部長の木村 繁さんという方、実はもの凄くカール・セーガンに関心があって、社内的には、カール・セーガンっていうのは、まともな科学者・宇宙学者という風には一般には見られてないんだと言うのです。だからどんな風にして売るのが大事だという話から、---結局、朝日新聞の第4面に縦長で、36回のコスモスの抄訳連載をされたんですよ。これが話題になったというか、朝日新聞としても初めての試みで、一方、原本の出版が遅れて、その翻訳が間に合わない。結局、木村さんご本人と、奥さんもかなり（英語が）堪能で、1か月半ぐらいで上下編の印刷を完成させるんです。放送の前に出版、その宣伝も。そして夏に角川書店が、たまたまここも何周年かの記念で、コスモスのピクチャーブック、つまりコスモス撮影のシーンなどを撮ったいろいろな写真があるわけですが、それらを集めて4冊本で売り出そうということになった。さらに、小学館が学年雑誌で小学生向けの記事にしようというような話が整いましてコスモスの宣伝のほうは順調に進みました。

さあオンエア（放送）をどうするか、やっぱりコスモスというのは、NHKの教育チャンネルでやるようなものだから、夏休みに、一般の子供たちも視野に入れた番組にしたい。しかし営業的には、そんなの夏場には売れないということで、放送を秋にずらさないといけないということになったのです。当時、宇宙探査機ボイジャー1号、ボイジャー2号が打ち上げられていましたが、新聞は必ず目標に接近すると刻々その推移を夕刊のトップに写真を載せるんです。そこでボイジャー1号が土星に大接近する時に合わせたら、その写真が毎晩夕刊で追いかけてくれる、だから---と、メディアミックスでとにかく「番組」の宣伝をするかという効果ばかり考えていました。11月の、これは今でもはっきり覚えているんですが、11月3日の月曜からプライムタイム（21時〜）で2時間放送する。そして火曜日も。次の水曜日は大統領選挙なんでその特集を。そして木、金と2時間ずつやって。土曜日から1時間（23時から24時）。最後の13日目の木曜日には、土星に大接近する日。それをアメリカのカリフォルニア州パサデナにあるNASAジェット推進研究所（JPL）、つまり

打ち上げ場所で衛星を管理してコントロールしている本拠地 JPL 研究所長にカー  
ル・セーガンから頼んでもらって、そこから（特設スタジオを設置して）生中継を  
やろうというのをトリにしたのです。そして宣伝から何から一気にかける。セーガ  
ンもこっち（日本）へ来て、東京中心にシンポジウムを開催。大阪では万博で小松  
左京氏らにお願いしてシンポジウムを開催する、盛り上げた結果、あんな番組で東  
京、大阪とも平均で2桁の視聴率が取れたんですよ。つまりそういうような積み重  
ねがあって、テレビ朝日も、編成の当事者らも感動してくれたというのかな。

#### <テレビ朝日編成責任者 小田久栄門との協力関係強める>

テレビ朝日の場合、そもそもネットワークの概念がわれわれの思っているのと違う  
わけです。

まず東京局は、地方の局へ経理的観点から交渉を進めて、番組ネットの全国展開を  
していくわけです。したがって担当窓口は連絡局で編成ではない。ところが我々は、  
プライムの大半が東京で制作され、その放送の成果は大阪の責任になるわけですか  
ら、大阪の要望を話し、東京の要請を直接聞きたい、そのまとめ役は編成ですから  
直接編成間で話し合いたいと強硬に言い、結果、連絡課長（後の専務）が「編成間  
の会議に連絡課長も出席することで連絡の主催」としましよとなり、編成部長も  
当初から3人目の小田久栄門というモーニングショーのプロデューサーを新任とし  
て収まり、月1回東阪交互にほぼ5時間ぐらい、話し合うことで理解を深めていっ  
たと思います。

#### <OTV時代の上司は大プロデューサーの小谷正一>

そこで小谷正一という人物についてですが、兵庫県龍野の人で、早稲田大学出身。  
早瀬圭一さん、元毎日新聞の方が書かれた本が数年前に出ました（「無理難題 プロ  
デュースします」岩波書店）。ただこの本は、毎日新聞から新大阪新聞、新大阪新聞  
から新日本放送、つまり毎日放送ですね、そしてその間のプロ野球の二リーグ開設  
あたりがメインで、OTVの話はかろうじてということですが、ここまででも、結構  
魅力的な方です。最初毎日新聞で事業部中心に、話がスタートするんです。宇和島  
の闘牛を西宮へ持ってきて、大失敗したりとかね。辻久子さん、12歳~13歳の辻久  
子さんを発見して、この人のお父さんが辻吉之助さんと言いますが、本当に全く素  
人なんだけれど上手くなるんですよ。そして小谷さんが毎日新聞の事業部当時に  
演奏会を開いて、一流にのし上げるんですよ。

そんなこんなで新大阪新聞つまり、当時は新聞の紙面配給制度というのがありまし

て、一つの新聞に紙面、紙の量が決められていたんです。それで全国紙などは夕刊紙の配給不足分を、毎日新聞は新大阪新聞を、朝日新聞なら日日新聞を作り、まかっていたということです。しかも作った以上維持していく必要があるわけで、新大阪新聞に出向して、闘牛大会を開くなど事業を立ち上げたりするのです。当時同僚だった井上 靖は、小谷氏モデルの小説「闘牛」で芥川賞（1950、昭和 25 年）とられたと。さらにサトウサンペイさんの話ですが、彼が大丸の受験の際の履歴書を漫画で描いたとの話を聞いて、新聞の四コマ漫画に起用したのが世に出るきっかけだったとか。（いろいろエピソードを残して）やがて小谷さんは毎日新聞に一旦戻るんですね。そこで毎日新聞がプロ野球の球団、毎日オリオンズを持つということになって（それにも関わっていくんですね）。それでパ・リーグまで作っちゃうんです。そんなときに、新日本放送のラジオの話が出てくるんです。新日本放送の放送部長として、今度は放送の仕事をしろという話になっていくんです。という風になにか最初の唾付けのような仕事をさせられる、しかしそれは、能力があるから、また結果を生むからなんだろう。そういう（豊富な経験）を経た人なんです。そして必ず2年ぐらいで帰っちゃうというか。新日本放送を始めて2年ぐらいでとにかく辞めてそして一旦、横浜に帰られる。そこで今度は、有楽町にできたビデオホールで呼び屋さんをやるんですね。その頃にオイストラッフ（バイオリニスト）をロシアから呼んで、これが来るかどうか分からんというのが、井上 靖の「黒い蝶」（1955 年）という小説になって書かれているということなんです。そしてビデオホールの頃に大阪テレビ（OTV）が開局するというので、呼ばれることになるのです。大阪テレビは編成局が朝日出身の原 清さん、営業局は毎日出身の永松 徹さん。いずれも常務。その間の仲を取る緩衝地帯として選ばれたのが小谷さん一人だけだったと言われています。

#### <関西初の民間放送テレビ OTV と開局秘話“堂島川にクジラ”>

ところで、組織的に見てみると（OTV の話だが）、朝日と毎日の緩衝役ということで、総合企画室というのができるんです。とにかくフロア的には、1階が営業局で2階が編成局としたら3階が総合企画室。そして所属は総務局付き。その総合企画室に編成課と企画課。編成課で番組編成から番組宣伝、考査・モニターもやる（ただし社外折衝は事業局担当）。そしてその企画課で、外国映画フィルムの買い付けから、制作費・資料関係それから調査を担当していましたね。スタッフの人数は4人ずつ。部屋はそれの倍以上あるんです。だから最初、部屋を大きくして、それだけの仕事だから やっぱり十数人配分されていたと思う。それを半分にして。あとの半分は

ソファ。我々半分だけで机に座って、仕事はそのまま。残った半分のスペースにはソファを置きましたね。そこへ例えばあの頃の著名人、山崎豊子さんとか、辻久子さんと、井上靖さん、それに五味康祐さん、そういった作家、音楽家、ジャーナリスト、いろいろな人が来て、半日くらい喋っていくんですね。

そして番組はというと、「俺は新日本放送のときは500ほど番組作ったけど、今度は作らんでいいんや」。つまり、KRT、今のTBS東京放送ですね、当時「KRTとNTV（日本テレビ）から要するにいいとこ取りしたらいいんや」。そして、原則は「絶対に値引きしない。値引きしたやつはやめや」と言うのです。

近代広告の先覚者 吉田秀雄（当時、電通社長）を訪ねて、電波料の相談に行きはるんですね。電波料をどないして決めるんやと。当時、新日本放送でいろいろあったけれども、結局満足のいく電波料の決め方ができなかったらしい。それを吉田さんに聞きにいった、それを元にして決めたと言うから、あの部屋はかなり基本的なところをほとんど一人で決めていたようなところがありましたね。

そして開局記念日をどうするんだという話になった、そこで会議を開いて、いろいろあでもないこうでもないという話になるわけです。小谷さんとしては、梅田からタクシーに乗って“OTV”へと言ったんだが、タクシーの運転手から“OTV”って何でんねんと言われた、知らないんですよ。だからまずは運転手に“OTV”を知らせることが大事やということで発想――堂島川にクジラを放そうという話になる。実際は、クジラは放されなかったんです。でも実際そうしたら、みんな話題にする。話題にしたならそれでええんや、ということなんですね。その結果、クジラを放して、死んだら死んだで死骸をね、開局記念やと言うてどこかに寄付するとかね、そういう風にすればいいと、というようなことまで開局記念の会議で話をしたんです。そして締めは、そんなんしたら、川水と海水とは違うからクジラは生きてられへん、そういう話をみんながしているので、そんな話してるんやったら止めやと言って（会議を）出てきたとかね。つまり小谷発言の真意を理解せず、現象面だけの話になると「止めた」となるということでした。開局記念をどうしたかということ、大阪の歌舞伎座、今の新歌舞伎座じゃなくてその前の歌舞伎座に二つオーケストラを集めて、音楽番組を生中継するんですよ。

【注】“開局記念にクジラ”の話は扇谷正造・草柳大蔵・小谷正一の対談集

「おもろい人やなあ～奇才、怪物逸話人物論」（講談社1984年発行）にある。

そして結局1年で辞めて年末、東京へ帰られたんですね。新年はとにかく値引きさせないということを言って。当時KRTから、全部KRTからネットしてくれとい

う話がかかりきつくあったらしいですね。日本テレビは、(編成の窓口は) 元陸軍中尉出身の人で、この人も大変な人でした。ところが一方、KRTつまり今のTBSは海軍出身なんですよ。片や海軍出身、片や陸軍出身。僕らやっぱり陸軍出身のほうが堅実やなあと言っていたんです、海軍の場合はなるほどスマートだけれどもというような感じでね。最後は小谷さんが決めるわけですよ。結局は半々ぐらいの形で落ち着くんです。開局記念も小谷さんが引き受けて、12月1日開局するんです。そして一段落して、12月31日に小谷さんはOTVを辞めるのです。辞めて東京へ行く、東京に行って吉田さんに会って、電通に入社。それから3年ほどでラテ局長になる、そういうような経過でしたね。

—— かなり長い時間を割いて、OTV時代のお話から、「コスモス」の話、それから「世界の初日の出」の話をして頂きました。多分、皆さま方もいろいろと頭でつなぎ合わせていただいたのではないかなと思いますが、小谷正一さんとおっしゃる方は今お話のような方で、高岸さんがOTVにお入りになった時のボスだそうです。OTVの後は電通東京を経て、独立されてデスクKという、いわゆるプロデューサー第1号の称号が与えられるほどの業績を重ねたような方です。

—— 小谷さんは、OTVの後にビデオホールへ行かれたんですか。

高岸氏 どうでしたかね。その前後関係はよく分からないのですが、とにかく“呼び屋”はOTVの企画室(のときから)何か、有名な人ではないですが、かなりやっておられたんですよ。

—— マルセル・マルソー(フランスのパントマイムアーティスト)とかですね。

—— それから「コスモス」の話については、これはお持ち頂きました資料とABCの資料にも書いてありますが、(インターネットの資料によりますと)

「コスモス」というのは1978年～1979年にかけてアメリカの公共放送(PBS)系列のKCET(ロサンゼルス)が制作・管理者となり、イギリスBBCと西ドイツのポリアル・インターナショナル、それから日本の朝日放送の協力により、20億円が投じられて制作された番組です。空前の視覚効果を伴った世界初の宇宙に関する超大型ドキュメンタリー番組。世界中60か国以上に配信され大きな話題となった。1981年エミー賞の部門賞を受賞。

セーガン自らが番組の進行を担当して、日本における放送は1980年当時、表記は「コスモス」というタイトルであったようです。放送以来、再放送、それからビデオ・DVDの販売もされており、セーガンが他界した1997年までにその視聴者数は延べ5億人といわれ、サイエンスチャンネルによると現在は6億人に達しているというようなもの凄い番組。それから平均視聴率が、関東が9.1%、関西が14.5%という数字であったようです。

ABCでは1980年11月3日～12日にかけて、当初は午後9時～11時、8日から11時～12時、13日生中継で午後7時～9時に放送された。日本放映時のセーガンの吹き替えは横内 正が行った。日本版は朝日放送と東北新社で制作したということが記されています。

それから「世界の初日の出」ですけれども、今の「コスモス」が創立30周年。それからお話にありました「世界の初日の出」は40周年の記念番組であったということで、高岸さんはいずれも非常に大きな周年記念の番組に立ち会っておられるということを整理させていただきました。

早くも1時間が経過いたしました。これは大事なお話ですが、我々関西テレビ、それからテレビ大阪、読売テレビでは全く考えられないことなんです、ネットチェンジというのが、朝日放送と毎日放送には非常に大きな歴史上の出来事だったようです。一昨日もさっきお話ししました毎日放送OBの友野庄平さんにお話をお伺いしたならば、やはりその前後には非常に大きな違いがあったという話をしていただきました。高岸さんは、実はそのネットチェンジのときの編成部長でいらっしゃいました。さあ、この時にどんなご苦労があったのか、どんなやりとりがあったのか。それから番組上では非常に大きな変化だったと思いますので、その辺りの話をお伺いしたいと思います。

#### <ネットの弱体化にどう立ち向かうか “選挙運動” スタイルで番組PR>

高岸氏 冒頭に申し上げましたように、民放101社のうちの1社だけ中間決算赤字。視聴率は本当にどんと落ち込んだんですよ。もちろん、それは事前に覚悟していましたが、少しでも小さくしたいと考えたのは“選挙運動”ですね。短期間での運動（宣伝）なら選挙運動が典型的（効果的）じゃないかなというので、トラック並べまして選挙の幕を張って、これを1週間か2週間かけて、トラックの台の上から番組の変更を連呼する。そんなことから当初やった覚えがあります。

一方、朝日新聞の現場は冷たいものでした。当時営業で担当窓口だった人が、後

に大広の社長さんになられた何とかさんで、今でも覚えています、僕はカラーの新番組表を持っていったんです。4月からこんな風になります。それを最後の面に出して欲しいということを強行に頼んだんですが、どうしてもダメなんです。扱いが違うということで、結局、大広から出してもらったというような形にして、最後はいろいろな経緯があったと思うんですが、カラーの番組表を最後の面に載せた覚えが確かにあります。

—— ネットチェンジによりまして、朝日放送そのものにとっては、どのような意味を持っていたのか。それからその中で人との交流を含めて、うれしかったこと、それからネットチェンジ以降でいろいろなものが変わっていったと思うんですが。その辺りはどんな風な感じですか。

高岸氏 とにかく、やがてそうなるだろうという風に思っていました。そうなったらこうなると分かっていたから、誰もとりあえず禁句でしたね。元々は当時の社長原清さんとTBS社長の諏訪博さんと、まずは朝日新聞の広岡知男代表ですかかなり前に「やっぱり朝日は朝日で云々」という話をされていて、ところがいろいろなことがあったんですね。当時は報道局が別会社になっていることから始まって、NET教育テレビの名称、その辺から変えないといかんとか、新聞ニュースの整理とか、それから株の持ち合いですね。だから2～3年かかっていたんですね。そして1974年の4月に広岡さんから原さんに正式要請があるんです。そして1年後に変わるわけですが、広岡さん（朝日新聞）から正式要請があって、その秋に原さんから諏訪さんに「いよいよ時機が来ました」ということで、11月18日に「来年4月1日をもってネットチェンジ」という基本的な話が決まるんですね。翌日19日に記者発表されて、全社員が知ったのはそれからなんですね。だから全く原さんの動きだけで決まっていたという状況でした。

【注】「新聞ニュース」

テレビ開局当初、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の三社が（編集権を持ち）制作、放送していたテレビニュース。

<「おはよう朝日です」 京都（KBS）、神戸（サンテレビ）に“お天気カメラ”>

—— その歴史的なネットチェンジがあって、それから4年ぐらい後ですか、「ABCスカイスタジオ おはよう朝日」がスタートしますね。これは未だに続いている番組で

すが。この時の経緯はどうだったのですか。

高岸氏 テレビ朝日は当時、8時の「奈良和モーニングショー」から始まっていました。従ってネット変更後の早朝は漫画しか放送しようがなかった。だから我々「朝起きて目を覚ましたら、漫画やっている局にいるのか」と悲哀を感じるというか。だから、この8時台をなんとかしたい、ところがそう簡単にはいかないわけですし、というところで、報道に十日市啓志という人がいましてね。組合をやったときに彼が書記長で、労働組合の専従をやっていました。その頃、僕は労政部にいましてね。労政でやり合った、やり合ったのが面白かったと彼は言うんです。その十日市啓志が報道局に戻ってきて、モーニングショーの担当を命じられるんですね。で、彼はいろいろ考えた結果、当時大阪タワーというのがありましてね、あのおお阪タワーのてっぺんからオンエアしたら話題になるだろうと、そのてっぺんでやりたいと言いつ出したのです。ところが総務局が「あんなところ、スタジオになるか、絶対にNOや」と。結局その説得を、労政にいたから総務局には強いだろうということで頼まれましたね。

でもそれだけじゃ、もの足りない、何か特色をつけないといけないというので、神戸のサンテレビとKBS京都からカメラ出してもらって、京阪神をスタジオにした朝の展開という風に銘打ったら面白いだろうと、報道局から申し入れるが、両方ともダメだと。たまたま僕の天王寺高校（大阪）の同級生がサンテレビにいましてね。神戸新聞からサンテレビの制作関係に出向していまして、その人に頼み、なんとか協力を取り付けました。ちょうど埋め立て地の向こうにオリエンタルホテルというホテルがあって、その上にカメラを置こうということになる。

それから京都へ行ったら、KBS京都というのは、白石古京さん一族の支配するところで、ちょっとやそつとでは動くようなところではない。そこでサンテレビの僕の同級生にも手伝ってもらって、3者で――KBS京都としての面子を尊重した方法で、結果として京都タワーにカメラを設置することになるんです。

だからこの3か所をベースにした展開というので「おはよう朝日」がスタートする。そのときに十日市啓志の発想で、 Hammondオルガン、伊知地さんといったかな、すつとんきょうな声が逆に話題になったんですね。未だにやっていますよね。それでテレビ朝日がね、やりたかったんです、本当は。だからABCがやると言ったときに「もうちょっと待ってくれ。そしたらテレビ朝日がやるから」と言って小田久栄門がかなり強烈に進めたんですが、間に合わなかったんですね。そのためにABCとしては「4月から決めた」と言って、先にスタートしたんですかね。その頃、今でも

覚えているんですが、営業に八木紫朗さんという「営業マン」っていう人がいたんですよ。この人が「絶対に、視聴率はそんな生番組やったりしたって、2〜3%や。今のほうが増しや。営業的には、4%だったけども漫画のほうが増しや」と言うんです。とにかく4%の漫画を抜かないといかんということでがんばって8%までいったことを覚えています。

—— 朝早い番組でしたから、局の皆さんはなかなか扱いづらかったみたいですね。だから外部スタッフが入っておられたという話を聞きましたけれど。そうでもないですか。

高岸氏 ABCの場合はその辺は、特に技術関係はどうなんですかね。細かくは覚えていませんが、東通が入っていましたかな。

—— でもやはりそれまでの様々なご経験があり、なおかつ小谷正一さんの教えがあって、思い切った発想、アイデアが浮かんで実行に移されたわけでしょうか。

高岸氏 1988年にシンフォニーホールからテレビ編成局長でかえってきたときでした。お祝いの電話をもらったのは、小谷さんとMBSの斎藤守慶さんです。斎藤さんは、OTVへ入ったときの東京支社の営業課長でしたね。それで存じ上げていたんです。小谷さんは、僕が編成局長になったときにすぐ電話もらって、おめでとうとか一切おっしゃらない、「編成局長やってんな」という話から、とにかく「できれば早くアメリカに行ってこい。アメリカで編成の筋道を直輸入しろ」と言いましたね。それと「スポンサーの合わせ方を研究してみろ」、とにかく「焦らないでじっくり構えてやってみろ」という話をされました。

実は「コスモス」の成功を受けて、次の話があったんです。「ニュークリアス」という核を扱った番組を作るという話です。1985年は広島原爆投下から40年に当たる。今日世界には5万発の核兵器が存在する。---人類絶滅の危機は目前にある、との認識から、問題を正確に理解するため日米共同で制作し、世界同時放送したいと。そして制作はハリウッドのコロンビア映画社、放送は米ABCのニュース部門がプライムタイムで全米放送4時間のシリーズで、我々も日本ゼロックスと京セラ提供で6億円の出資を準備する。ところが、この年アメリカの大統領選挙(レーガン2期目)があり、放送が重なったことから、突如“やむを得ぬ事情により”中止になる。反核がテーマということで、一切ご破算になりました。

<パ・リーグ優勝かかる「ロッテ・近鉄」戦 異例の長時間放送>

——— それでは次に野球二題についてお伺いします。一つは1988年10月19日、パ・リーグ優勝に関わるロッテ・近鉄ダブルヘッダーの話です。2位がこのとき西武だったようですが、長時間のぶち抜きで放送されて最終的にはテレビ朝日も巻き込んだということで、このとき編成に関わっておられましたか。

高岸氏 僕はシンフォニーホールに行っていました、3年経って、編成局長で帰ってきたのが1988年。その年の10月19日でした。消化試合とはいうものの、シーズン初の契約で残っていた最後の2試合消化のため川崎球場へ中継車を持っていった。テレビ朝日は川崎球場で優勝が決まる確率はほとんどない、したがって放送することはないと思っていた。しかもあの頃、テレビ朝日は西武を応援していて、西武が優勝したら（中継放送の）権利が出る可能性があるという状況でした。その頃、たしか僕はどこかにいて（編成の）部屋に帰ってきた。編成部はもうほとんど中継放送の準備も終わり、編成部長と少しの部員しか残っていなかったと思います。しかもローカルだから5時か6時頃に終わればよいわけですね。それで放送していたところが、5時頃に第1試合が終わるんです。それがね、近鉄が勝つんですね。そうするとこの2試合、近鉄が2勝すれば近鉄が優勝、リーグ優勝なんですよ。そして1勝1敗あるいは1勝1引き分けなら、西武が勝ち。近鉄じゃなくなるんです。だからこの2試合は確かにそういう意味では、近鉄にとっては、というよりもパ・リーグにとっても重要な試合だったんです。しかし当時はセントラルが優勢ですから、オンエアにしたって視聴率がそう取れるものでもない、ほとんど我々も消化試合のつもりだった。ところが第1試合勝って、第2試合でも近鉄優勢なんです。5時台へローカルですから、何となく放送していたんですね。でもほとんど編成部は5時過ぎて手薄になるし、たしか編成部長と僕と2人くらいしかいなかったと思う。そしたら近鉄がね、5時過ぎて点数を入れるんですよ、入れ出したらね、これで勝てばリーグ優勝でしょ。ABCは近鉄とは関係が深いし、無視するわけにはいかないですね。たまたま6時から「靈感ヤマカン第六感」というローカルの番組だったので、テレビ朝日に関係なしに、6時半まで放送しながら様子を見ようと決めていたところ、近鉄が優勢になってくるんですね。それで念のためと思って、テレビ朝日の小田久栄門を探しているうちに、電話がつながり「実はこうこうだと。だからABCローカルでもやるから」と了解をとり、それで様子を見ていたら、とにかく近鉄優勢で行くので、ABCとしては降ろすに降ろせない（放送をや

めるにやめられない) ということになって、テレビ朝日の了解だけとって、突っ込むんですよ。そしたらテレビ朝日がレギュラー番組を中断して野球放送をやりだした、つまり乗ってきた。結局、もうほとんどそれからはテレビ朝日の番組ですから、テレビ朝日と相談しながらの推移になるわけですよ。ところが「ニュースステーション」の久米宏氏は従来から野球で押すのに厳しい方でしたが、その久米宏さんが、番組の半分に野球を残して、半分に自分が立って、これが今最高のニュースですから、これを優先します (と放送を続ける)。

ところが、その頃にロッテの監督がもめ出すんですよ。その結果、8 時頃からとにかくもめ出して進まないんですね。進まないからといって切るわけにもいかない、ということで久米さんもやきもきしながら、結局「ニュースステーション」の時間が終わっちゃうんです。最後は午後 11 時、12 時くらいになって引き分けて試合が終わるんです。引き分けでは、近鉄の優勝はないわけですから、そのときは小田久栄門からの指令で西武へ中継車を出していましたから、西武の選手たちが雄叫びあげて球場の中になだれ込んで来るというシーンで終わるんですね。

そのときの近鉄監督は仰木 彬さん。近鉄がこういう形で知らされたということをしてすごく感激してもらった。系列としてもものすごい視聴率でしたからね。ただ売値としてはレギュラー番組をはずしての放送ですから ABC だけでも、6000 万円以上の損害だったはずですよ。損したけれども、それに値するだけの評価はされたと思います。と言っていたら、次の年に、近鉄が優勝するんです。リーグ優勝しまして、近鉄の第 1 戦と第 2 戦の放送権は ABC に権利を渡すというようなことで、あの頃は一本 3 億とか 4 億としていましたけれども。ただ、この記録すべき放送が、朝日放送 50 周年記念の社史に一行も書かれていないんですよ。

——— それは残念。

高岸氏　そしてテレビ朝日の開局 40 周年記念のときに、テレビ朝日の「3 大スポーツ番組」とありまして、一つは中山律子のボーリング。その次はアントニオ猪木と当時のボクシングで世界ヘビー級チャンピオン モハメド・アリとの戦い (1976 年 6 月 26 日)。この試合では猪木さんがモハメド・アリの足を攻めたので有名になった。これが 2 番目。そして 3 番目がロッテ・近鉄ですよ。

——— お手柄にしちゃったわけですね。

高岸氏 だからロッテ・近鉄は、小田久栄門が銀座から指令していただけなのに、テレビ朝日の「3大スポーツ」に入っているのです。ところが朝日放送の50周年記念の社史には、近鉄—ロッテ戦の記述が一行もないんです。

<夏の高校野球中継 “おしゃれなコマーシャル” の発想は>

——— ところで「夏の高校野球中継（甲子園）」の番組の画面の下のところにコマーシャルが流れます。あの発想というのはどこから出てきたのですか。

高岸氏 試合が終わって、チェンジのときですね。これは確かスポーツの作った絵にスポンサーが乗ったと聞いていましたけどね。最近はやっとまた違う形になっていますが。それから「熱闘甲子園」はネットが変更になったとき、テレビ朝日がやりたいと言ってきたんですよ。ABCは最後、11時台でダイジェストなんて出すのはもういいじゃないか、という雰囲気だったんですよ。テレビ朝日は、それじゃあテレビ朝日から取材クルーを出してよいかというところまできたのでね。それはちょっとというので編成で、もしスポーツが出来ないのなら、どこか制作会社にでも発注するから、23時台でとテレビ朝日を断って、ABCで手配したと思います。ABCは、この「熱闘甲子園」をプライムタイムで2年ほど放送したことがあるんですよ。そんなことが積み重なって、この30周年だとか、「世界の初日の出」だとかへつらなっただと思います。その代わり、テレビ朝日も、あの頃は「ルーツ」とか「不確実性の時代」（ジョン・K・ガルブレイス）とか、BBCが作ったドラマを1週間分、夜に放送したりしましたね、というのでかなり営業的にも稼いでいったという経過はありましたね。

——— そういう長いご経験の中で、今は高岸さんのお眼鏡にかなうと言いますか、よく見ていらっしゃる番組ってありますか？

高岸氏 いや、もう今のテレビはほとんど見ていないですね。

<退職後も“宇宙”にこだわる 小惑星探査機「はやぶさ」のPRなど>

高岸氏 いや、もう時代が違っているし、その間ね、卒業（会社を退職）してすぐにNPO法人「日本惑星協会」というのを立ち上げました。カール・セーガンの遺言でね。これから宇宙の時代は民間が中心になってやらないと、そのとき彼はロサンゼルスで事務所をちゃんと持って、「惑星協会」を作っていたんですよ。そしてボイジ

ャーから NASA へ自分も出かけて行って、自分も一緒になって協力していたのです。ところが、日本では社団法人とか、財団法人のような形でしかないわけでした。そんなときに、日本でも NPO 法人というのが作れるということになったんですよ。これなら何とか出来るんじゃないかということで、たまたま朝日放送を卒業したときに、その NPO 法人「日本惑星協会」を発足させ、アメリカの「惑星協会」の企画へ協力し、一般から火星の想像画を募集しまして、それをもとに「宇宙戦艦ヤマト」の漫画家（松本零士）をメインに番組を作ってもらいました。「火星はぼくらの惑星だ」というような番組でした。それをテレビマンユニオンで2番組作ってもらって NHK で放送したんです。NHK エンタープライズが気に入ってくれて、さらにそれを素材に、松本零士氏が主人公になって、15分番組を4本だったか作って収めた覚えがあるんです。そんな活動しているのを、JAXA、当時の宇宙科学研究所的川泰宣さん（宇宙工学者）の目に留まったんですよ。とにかく「自分らではそういうことは出来ない」と言うので、小惑星探査機「はやぶさ」のときに、「それじゃあ、PR を我々に任せてくれますか」と申し出たところ、全部主催までこっちが引き受けることになったんです。「星の王子さまにあいに行きませんか」キャンペーンと題し、アメリカの惑星協会も動員し世界から88万人の名前を集めて、それを薄いアルミ箔に印刷して、ターゲットマーカ―っていうのに込めて、「はやぶさ」に託すんです。「はやぶさ」が持って行って、小惑星イトカワに落とすんです。1回目失敗するんですけど、2回目に成功しました。その2回目のところへ名前が入っていたんです。日本に送ってきた映像を見ると、その名前を入れていたマーカ―が横に確認できるんですよ、ただその後、姿勢が崩れて、油が漏れるということがあって、「はやぶさ」はしばらく行方不明になるんです。そして最後は帰ってきてという経緯を辿るんですね。それが映画3本になるんです。20世紀FOX、東映と松竹かな。画面に88万人の名前云々というのは映画にも映っていました。ただ詳しくは知らされていなかった。つまり日本の官僚的な仕切り方の現れですね。的川さんが自分の本には書かれていました。

<民放は5局から3局に減らすべき～10年後のテレビ～>

—— そうしますと、まだまだ面白いことをやっていらっしゃるんですね。最後に10年後に放送はどうなっているんだろうとお伺いすることになっているんです。

高岸氏 テレビ東京の石光 勝さん（「テレビ局削減論」新潮新書）が、「民放は今、めし食うのと通販ばかりでとにかく面白くない」ということから始まって「お前が

その先鞭をつけたんじゃないか」と言われると。そうらしい。それも告白されたうえで、NHK はともかくとして、民放を「5 局から 3 局に減らすべきだ」と書かれています。

—— それとともに、年配者・高齢者向けの番組っていうのがなかなか見つからない、とくに地上波で見つからないなという話にいつもなるんですけども。BS か何かでこんな番組をとっているものはありますか。 宇宙ものとかご覧になりますか。

高岸氏 宇宙ものは、あの「はやぶさ」を中心に、あれを抜くようなものは当面ちょっと出ないでしょうね。確かに糸川英夫さんというのは大変な人だし、その後に後輩が連綿と続いているんですよ、鹿児島の内之浦に何回か行きましたけどね、打ち上げると事故がある可能性があるんで、漁場を警戒しないといかんわけですね。打ち上げの時間が決まったら、交渉に行く担当者は全部、その漁船の人たちとの話し合いをする、それにはもの凄く酒が強くないとつとまらないと言っていましたね。それが去年「イプシロンロケット」という半額近い金額で打ち上げられるというところまで開発されました。というように、日本の進歩も大変なことになってきつつあるわけです。

—— ひょっとすると数年後にまた、高岸さん制作の番組が見られるんじゃないかなということを勝手な司会者の締めくくりにさせていただきまして、まず私の役割を終えさせて頂きたいと思います。さあ、後は皆様方が、どんどん様々な時代、時代でご質問があるんじゃないかなと思いますので、どうぞ自由に。

—— 高校野球中継のワイプのコマーシャル、丁度あれは私が昭和 37（1982）年に日本宣伝に入ったんですよ。住友グループの提供でした。回と回のコマーシャルをどうするかというときに非常に困って散々相談して、画面全部つぶすのはおかしいだろう。 3分の1でワイプにして、住友グループ全社の名前を流そう、そして3分の1スタンド風景を映したら、全体の野球の雰囲気をつぶさずにいけるんじゃないかということで、多分あの形式のコマーシャル、野球中継の間のコマーシャルになったと思う。スポーツ中継、例えばボクシングとボクシングの間のコマーシャルとは違う、初めての試みになったのではないかと思うんですね。

高岸氏 そうでしょうね。そのくらいの時期だったと思います。

—— 37年の夏休みの間は、私は正式には38年入社なんだけれども、前の年からアルバイトでその夏休みの間はずっとモニター写真を撮っていたんですよ、報告するのに。

高岸氏 高校野球の放送には自ずと制約がありますし、一方、客席のいろいろな人の表情というのは、それなりに興味深いところがあり、好評だったと思います。

—— そうです。それも朝日放送の人が3分の1にするから、ちょうどスタンドの応援風景とか家族を撮れるから面白いと言っていました。

高岸氏 スタンドの風景も生きる、そしてコマーシャルも生かしてというのは確かに良かった。コマーシャルから開発されていった側面も大きかったと思いますよ。

—— この聞き取り取材というのは、高橋信三基金の助成を受けて始めているんですが、その大きなテーマに「高齢社会とテレビ」というのがあるんです。例えば10年後とか、現在もそうなんですけれども3人に1人ぐらいが高齢者になる、ところが地上波においてそういう番組がない。「もともと地上波は、そういうお年寄り向けの番組を作ってこなかった」とそういう言い方をしているOBもいるんですが、今もし編成局長ならば、10年先、20年先を想定したとき、どういうことが考えられますか。

高岸氏 その頃の人々がまたやっぱり、うまく見つけるんじゃないですかね。

—— 大学関係者の研究報告などでは、高齢者がテレビとの付き合いの中で娯楽志向の人、娯楽をなんとなく見ているというので満足している人と、そうでないグループとが高齢者の中でも分かれているようなんです。

高岸氏 だけど、そういう人たち、つまり娯楽でないほうを見る人がNHKを見ているかという、そうでもないですよ。さっきの宇宙の話じゃないですけど、いわゆる（民放では）「サイエンスZERO」、「地球ドラマチック」だとか「歴史秘話ヒストリア」はやっていないですよ。それじゃNHKかということでもないんです。

—— 今お話ありましたが、もう超高齢化社会に入っていて、民放ができる役割なんてあ

るのでしょうか。その高齢者に向けての番組を制作するにあたって、スポンサーとの絡みでなかなか多分現場も分かっているながら踏み切れないだろうなという気はするんです。今もし編成局長であれば、「年寄り向けの番組作ろうぜ」という号令は、現場としてはかけ辛いでしょうね、きっと。

高岸氏 昔あのシンフォニーホールを3年（シンフォニーホール事業本部長）ほどやっています、音楽会をかなり見に行ったりしました。倉敷に素晴らしいホールがあり、そのホールで倉敷国際音楽祭と題して各パートに一流のソリストをオーケストラの団員に加えて、朝比奈隆氏に指揮をお願いしてベートーベンの第一番からとモーツァルトは逆に41番からを組み合わせさせてやったことがありました。非常に評判になりました。「お年寄り向け」というより、結局アイデアではないかと思いたすかね。

—— ベートーベンは1番から9番までやられたんですか。

高岸 はい。コーラスも入れてね。間にそれを仲介する人が「これはお金になる」というんで乗り出してきましたね、僕らは手を引いた。ところが朝比奈さんはね、僕らは手を引いたと言っているのに、自分でやはり行かれるんですよね。それは一流のソリストクラスですから、音が違うんです。だから反応が違うのでえらくお気に召したんだと思います。

—— そうですか。北野さん、ご感想はいかがですか。

—— いろいろと知らないお話をたくさん聞かせてもらったから、よかったです。

高岸氏 もし5分でも10分でも話があったら、橋本さん、技術の話だね。この「日の出」の話とか。これは、確かに舞台を作るのは編成の役割ですが、実際にこれを実現できるのは現場ですからね。

—— さきほどの高岸さんのお話では時代、時代というのがよく出てきました。技術のほうでもそれをサポートするというか、それも時代なんですね。要するに今までテレビというのは地上波でやるとなれば、その地域をやる、あるいは東京と大阪をネットで組む、ギリギリいっぱい国と国とを結ぶという技がなかったんです。ところが1960年代～70年代に、この10年間いうのはいわゆる宇宙のロケット、

衛星の技術がものすごい勢いで進んでいったのです。従ってそこで、宇宙通信というジャンルがはっきりできて、単なる電話ではなくて映像が送れる、なおかつ地球規模でネットワークができるという風な時代に入ったときでしたよね。ただ世界的にも丁度そういう環境が整った、その時代にうまくそういうテーマと合致したと言えるんじゃないですか。そういう意味では、技術を担当していた我々のレベルでも、非常に楽しい仕事をさせていただいたなという風に思いますね。

高岸氏 OTVの歴史はね、中継関係では守屋篤太郎さんね。それから木村久生さんでしょう。両巨頭が2人もいたんですよ。この人たちが本当に技術関係の開拓者というか。守屋さんほとにかく一つ終わったら次にチャレンジされるんですよ。祇園祭から始まってね、最後は瀬戸内海で船上から中継とか、「どないして（マイクロを）飛ばすか」という問題があるわけですね。最後は富士山頂上からの生中継でしょう。富士山の山頂まで中継機材を持って行ってどうして中継放送をするんだろうとか、割に技術関係の開拓というのはすごかったですね。

——— 一つお伺いするのを忘れていました。あの高校野球の中継もそうですが、サンテレビとのスポーツの中継(阪神タイガース)というのは非常に強いものがあります。あれはやっぱり「おはよう朝日」が下敷きになっているんですね。

高岸氏 ええ。これはもう「おはよう朝日」と、それからたまたまそれをつないでくれた神戸新聞からサンテレビへ行った清水治郎という天王寺高校のときの同級生なんですよ。それが皆、局内の人たちを紹介してくれてね。結局、後は営業も大変やったと思うんです。(阪神タイガースのゲームを中継するとき、サンテレビは)夕方6時から6時半から始まりますね。そして7時まで。それから我々ABCが引きついで7時から放送が始まる、8時半か9時半くらいに終わりますね。それから後の部分をサンテレビでまた放送するということなんです。もちろんその間のスポンサーはABCで付けたと思うんですよ。阪神に対しても非常に好印象を持たれたと思うんです。

——— なるほど。残念ながらこの部屋を使う時間がリミットになってきました。この続きは個人個人で今後もお話を聞いて頂ければと思います。  
本日のゲストはABCのOB高岸敏雄さんでいらっしゃいました。本当にありがとうございました。お元気でますますご活躍くださいませ。 以上